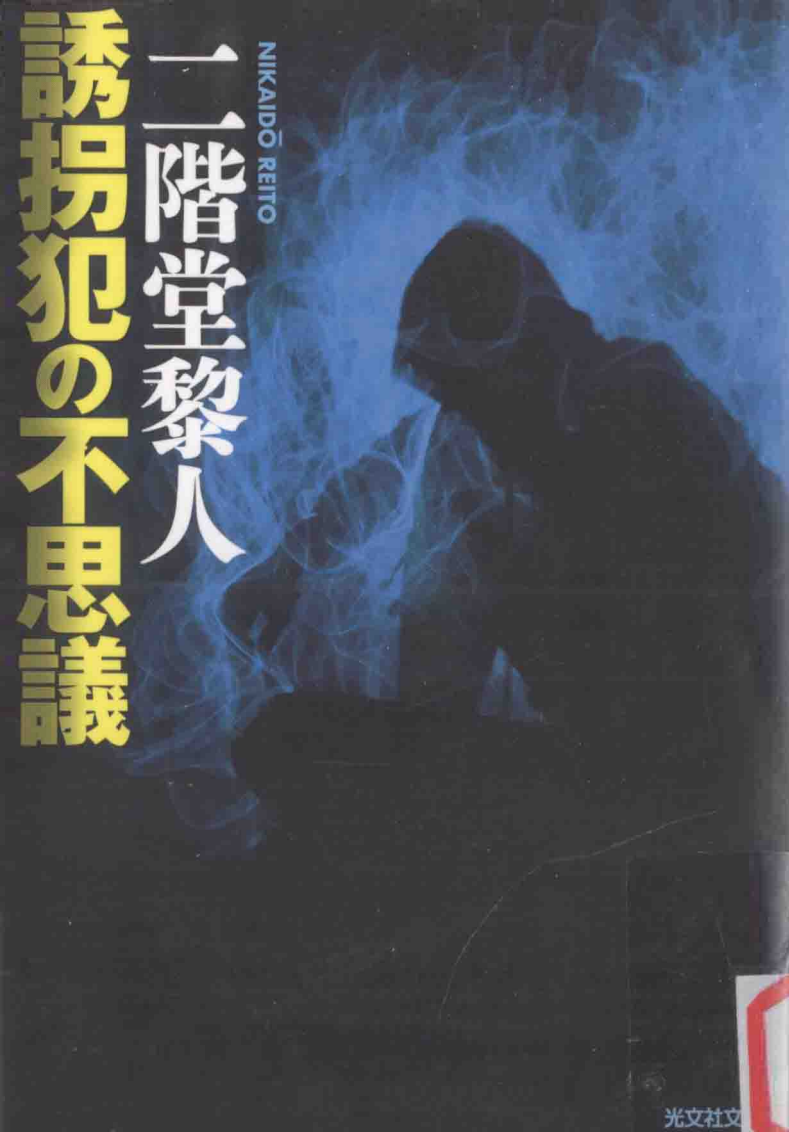




NIKAIDŌ REITO

二階堂黎人

誘拐犯の不思議

光文社文庫

常州大學圖書館
誘拐犯の不思議
藏書章
二階堂黎人



光 文 社



光文社文庫

誘拐犯の不思議

著者 二階堂 黎人

2013年1月20日 初版1刷発行

発行者	駒井 稔
印刷	豊国印刷
製本	関川製本

発行所 株式会社 光文社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8113 書籍販売部

8125 業務部

© Reito Nikaidō 2013

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN978-4-334-76521-7 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複製複製(コピー)することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本書をコピーされる場合は、事前に日本複製権センター(<http://www.jrrc.or.jp> 電話03-3401-2382)の許諾を受けてください。

組版 萩原印刷

『誘拐犯の不思議』目次

第一部 心霊写真家

第一章 黒い心霊写真家 9

第二章 三枚の心霊写真 25

第二部 誘拐事件

第三章 誘拐事件の顛末(1) 47

第四章 誘拐事件の顛末(2) 62

第五章 誘拐事件の顛末(3) 82

第六章 誘拐事件の顛末(4) 102

第七章 誘拐事件の顛末(5) 121

第八章 誘拐事件の顛末(6) 140

第九章 身代金の受け渡し(1) 160

第十章 身代金の受け渡し(2) 183

第十一章 彩子の救出 202

第三部 犯罪調査

221

第十二章 サトルの質問

223

第十三章 サトルの調査

243

第十四章 サトルと十姉妹刑事

262

第十五章 暴走族のリーダー

282

第十六章 プロデューサーと広告マン

298

第十七章 接点の発見

315

第十八章 ホームレス殺人事件

334

第十九章 どちらが容疑者？

353

第二十章 恐ろしき犯罪

371

第二十二章 浮かび上がる容疑者

383

第四部 真相暴露

399

第二十二章 真犯人との対決

401

第二十三章 アリバイ・トリックの崩壊

423

第二十四章 心霊写真家の挑戦

455

解説

鏑木蓮

477

光文社文庫

誘拐犯の不思議

二階堂黎人



光 文 社

『誘拐犯の不思議』目次

第一部 心霊写真家

第一章 黒い心霊写真家 9

第二章 三枚の心霊写真 25

第二部 誘拐事件

第三章 誘拐事件の顛末^{てんまつ}(1) 47

第四章 誘拐事件の顛末(2) 62

第五章 誘拐事件の顛末(3) 82

第六章 誘拐事件の顛末(4) 102

第七章 誘拐事件の顛末(5) 121

第八章 誘拐事件の顛末(6) 140

第九章 身代金の受け渡し(1) 160

第十章 身代金の受け渡し(2) 183

第十一章 彩子の救出 202

第三部 犯罪調査……………

221

第十二章 サトルの質問

223

第十三章 サトルの調査

243

第十四章 サトルと十姉妹刑事

262

第十五章 暴走族のリーダー

282

第十六章 プロデューサーと広告マン

298

第十七章 接点の発見

315

第十八章 ホームレス殺人事件

334

第十九章 どちらが容疑者？

353

第二十章 恐ろしき犯罪

371

第二十二章 浮かび上がる容疑者

383

第四部 真相暴露……………

399

第二十二章 真犯人との対決

401

第二十三章 アリバイ・トリックの崩壊

423

第二十四章 心霊写真家の挑戦

455

解説

鏑木蓮……………

477

第一部 心靈寫真家

第一章 黒い心霊写真家

1

「……最初にも言つたとおり、俺は別に自分の心霊的な能力を自慢するとか、誇っているわけではない。これは生まれつきの本能であり、捨て去ることができない天性の技能にすぎない。俺自身にも、それはどうしようもないのだ。むしろ、若い頃には、こんな不気味な力を持つている自分をうとましく思つたし、嫌つたものだった。

死者の姿や顔が見えたり、死者の気配を感じたり、死者が呼ぶ声が聞こえたり……そんな恐ろしいことが日常茶飯事で起きるのだ……想像してみてくれ……目を瞑ろうが、耳を塞ごうが、この心の中に、奴らや靈魂の蠢く姿が、血塗れの死に様が、不気味な映像となつて浮かび上がってくるのだ。

俺は、それを止めることができない。

方法がないんだ。

……君たちにも解るはずだ。普通なら、そんなことが起きれば、頭がおかしくなっているだろう。君たちなら、我慢などできるはずがない。絶望的になって、自分で自分の命を絶とうという者も出てくるはずだ。

そう。俺だってそうだ。子供の頃、俺は幽霊や靈魂から逃げようとして、何度か自殺を図ったんだ……ほら、俺の手首を見てくれ。この傷跡は、ガラスの破片を使って自ら切ったものだ。それから、首吊り自殺をしたこともある。公園の木に縄をかけてぶら下がったんだ。他にも、走っている車の前に飛び出したこともある。

……だが、だめだった。どうしても、俺は死にきれなかった。手首を切った時には、家族がすぐに発見してしまった。首吊り自殺をした時には、太い枝が何故か折れてしまった。車に撥ねられた時も、十メートル近く飛ばされたのに、他の車のボンネットに落ちて、軽い骨折ですんでしまった。

つまり、こういうことだ。俺が死ぬのを、いつでも、奴らが邪魔をするわけさ。幽霊や靈魂どもが、俺をこの現世に留めておこうとしている。生かしておいて、俺にある役目を担わせようとしているんだ。

……どんな役目かつて？

それは、俺を、通信役に仕立てるためさ。霊界と現実界との門番にするためなのだ。奴らは、俺を通じて、君たちのような一般人にあることを知らせようとしている。

自分たちの存在を訴えているのさ。

それから、自分たちの無念や恨みや憎悪を伝えようとしている。

要するに、俺は霊界の広告塔なのだ。テレビの受像機みたいなものだ。逆に言えば、君たち一般人は、この俺を通して、幽界のことを垣間見ることができのさ……」

低い陰気な声で、だらだらと話し続けているのは、心霊写真家の上祐レイという男だった。

それを聞きながら、講堂の客席にいるシオンは早くもうんざりしていた。

つまらない話だなあ。それに、何だよ、あの悪趣味な格好したら。完全に気取りすぎだよ。外見で、こつちを脅かそうと思つても無駄なんだからね。幽霊なんか、いるわけがないじゃないか。馬鹿馬鹿しい——。

そう思いながら、シオンは顔をしかめ、細めた目で、壇上にいる上祐レイの様子を観察した。

俯き加減の心霊写真家の顔は病的なほど白く、ザンバラな長い黒髪で、半分近くが隠